
クラシック鑑賞記～コンサートホールへ行こう！

—◆—演奏会情報—◆—

2012. 1. 24 (火) 大阪交響楽団第162回定期演奏会

(会 場) 大阪 ザ・シンフォニーホール

(曲 目) [1] A・ドヴォルザーク 序曲「謝肉祭」
[2] A・ドヴォルザーク ヴァイオリン協奏曲 ※
[3] A・ドヴォルザーク 交響曲第9番「新世界より」

(指 揮) 秋山 和慶

(管弦楽) 大阪交響楽団

※ (ヴァイオリン) 渡辺 玲子

—◆—鑑賞記—◆—

[はじめに]

今回の定期演奏会は、オール・ドヴォルザーク・プログラム。そして、日本を代表する指揮者・秋山和慶氏による演奏とあり、とても楽しみに足を運んだ。

御存知のとおり、秋山和慶氏は桐朋学園の出身で、世界的指揮者（←この表現にやや違和感を覚えるがあえて使用）である小澤征爾氏とともに、指揮法確立の第一人者である斎藤秀雄氏の下、研鑽を積み、日本、アメリカを中心に活躍してきた。

近年は、日本での後進育成に励み、各地のオーケストラの指揮も精力的に行っている。

この交響楽団との共演で聴くのは3度目。他に2度ほど聴いたことがあり、東京のサントリーホール正面席で、マーラーの交響曲第6番を聴いたときの印象が未だに忘れられない。

ヴァイオリニストの渡辺玲子氏は、大阪では以前、朝比奈隆氏のコンサートで良く出ていたと記憶しているが、世界の主要オーケストラのいくつかに客演している名手で、わたしは今回が、初めて拝聴することとなった。

久々に聴くドヴォルザークの名曲、どんな演奏が繰り上げられたのか、ほんの少しとなりますが、紹介したいと思います。

[1] A・ドヴォルザーク 序曲「謝肉祭」

ドヴォルザークの交響曲を演奏する際、良く組み合わせて演奏される序曲で、耳にされたことがある方も多いのではないかと思う。プログラムから曲紹介を少し拝借するが、もともと「自然と人生と愛」という序曲3部作のなかの第2曲が、この「謝肉祭」というタイトルの序曲だそう。第1曲が「自然の中で」、第3曲が「オセロ」で、どちらも1度か2度、聴いたことがあるが、まず演奏される機会はない。

さて、序曲「謝肉祭」だが、出だしでやや乱れを感じたが、中間部の静かなメロディー部分でようやく整い、フィナーレにかけては最高のまとまり具合となった。

多分に秋山氏の力量によるものではないかと、そう感じた。

[2] A・ドヴォルザーク ヴァイオリン協奏曲

ドヴォルザークの協奏曲で良く演奏されるのは、チェロの協奏曲で、ヴァイオリンはあまり演奏されない。数度聴いたように思うが、あまり印象にない。今夜の演奏を聴き、改めて良い曲だなと思い、ドヴォルザークの素晴らしさを再認識した。

ヴァイオリンの演奏は、前半、少し雑に感じたが少しずつオーケストラと溶け合い、良い味の音となっていった。とくに、中間部のフルートとの掛け合いは、印象的だった。

ここでも、秋山氏のキレ味というのか、音のメリハリの付け方というのか、その采配ぶりが功を奏し、絶妙なバランスでヴァイオリンとオーケストラのコントラストを生みだしていたように思う。

[3] A・ドヴォルザーク 交響曲第9番「新世界より」

言わずもがな、かの有名な「新世界交響曲」。ドヴォルザークといえば、この曲を浮かべない人はいないのではないだろうか。しかしながら、CDや数々の名演奏家たちによる音楽を聴いているだけに、ナマで聴いたとき、良い部分とそうでない部分が顕著になる。

これまで、何度かこの交響曲を演奏会で聴いたが、「良かった！」と思ったことはない。それだけに、今回もやや不安な気持ちを持っていた。

定期演奏会で、こういう聴き馴染みのある名曲を取りあげることは、オーケストラにとって、勝負をかけているのかもしれない。耳の肥えた客（とくに定期演奏会なら…）を満足させることは、そう容易ではないからだ。

第一楽章の冒頭、弦楽器のメロディーに始まり、ホルンが鳴り、フルートのメロディーへと、とても良い始まりで、期待できるか、と思っていたが、徐々にバランスを崩していく。どうも内声パートの響きがもう一つまとまっていないように感じた。やはり、一流と言われるオーケストラは、内声部分のパート（第2ヴァイオリンなど）の響きが良い。

第2楽章のオーボエソロの部分で少し持ち直し、第3楽章、第4楽章ともにそこそこ良いが、盛り上がっていく部分でどうしても乱れを感じてしまったのが、残念でならない。フィナーレでの盛り上がりは、ナマで聴く凄みを感じた。

秋山氏の円熟の極みというか、芯のある音楽性、操縦術を感じ見ることでできた、素晴らしい演奏会だったと思う。鳴りやまない盛大な拍手が会場を包んでいたことが、何よりの証拠だと思う。

[おわりに]

聴きなれた曲だけに、良い部分やそうでない部分も良く分かり、耳の肥えた客にとっては、「もっと良い演奏を…」という思いだけに終始してしまいがちだが、やはり演奏会会場に行き、ナマの演奏を聴くと、CDやDVDなどでは分からない細かい音が良く聴こえ楽しい。

また、管楽器から弦楽器へ、弦楽器から管楽器へ、と音を引き渡していく様子が、単に音という目に見えないものだけでなく、何かバトンが引き継がれているような感じで、その動きが見えるというのか、感じられるというのか、そういう細部の音楽の流れを味わうことができる。

やはり、コンサート会場に足を運び、そこで生まれるその瞬間にしか体験できない音楽は、それはそれで素晴らしいと改めて思った。